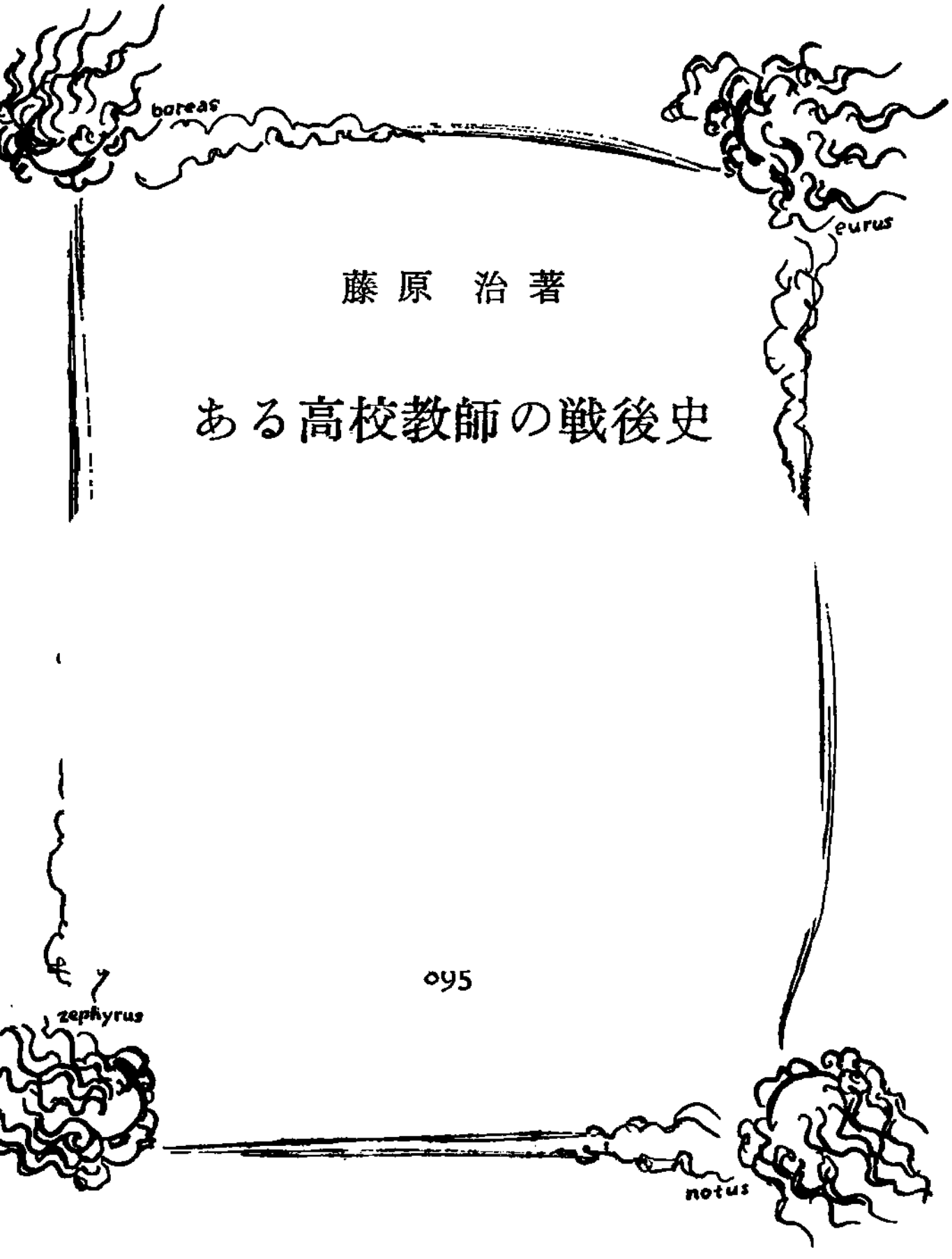
藤原 治著

ある高校教師の戦後史

岩波新書

895



藤原　治著

ある高校教師の戦後史

095

藤原 治

1908年島根県に生まれる．松江中学・松江高等学校卒業
1934年東京大学文学部国史学科卒業
1935年～郁文館中学・商業，育英中学等教諭
1943年～島根県に帰り，県内の中学教諭，戦後は高校の教諭・教頭・校長を歴任
1968年安来高校長退職
現在―島根「根を下ろす教育の会」

ある高校教師の戦後史　　岩波新書(青版) 895

1974年 5 月25日　第1刷発行 ©
1974年 6 月10日　第2刷発行

著　者　藤原治（ふじわら はる）

東京都千代田区一ツ橋2－5－5
発行者　岩波雄二郎

長野市中御所2－30
印刷者　田中忠

発行所　東京都千代田区一ツ橋2－5－5　株式会社 岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　大日本法令 印刷・製本

目　次

暗い影……一
1　東京で（一）
2　師と友（七）
3　敗　戦（一三）
混乱の中……二一
1　二本松（二一）
2　図書とりかえし（二六）
萌え出るもの……四一
1　二・一ゼスト（四一）
2　校長追放（四八）
3　若い力（五五）

わがルネサンス……五九
1　昭和二三年・春（五九）
2　赤山炎上（六四）
安保のころ……七七
1　よしきり（七七）
2　反動の浪（八二）
3　わが詩（九〇）
校長というもの……一〇一
1　宣誓（一〇一）
2　案（一〇七）
3　一年転出（一一三）
地域と学校……一二一
1　気圧（一二一）
2　周辺校（一二六）

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

3　農業科と分校（一三〇）
校長と生徒……一四三
1　風船の歌（一四三）
2　〝美〟の年（一四八）
3　表現の自由（一五七）
沖縄の声……一六五
1　全国高校長会（一六五）
2　沖縄へ（一七四）
3　本土なんぞ遠き（一八二）
人間復興……一八七
1　ある実験（一八七）
2　清算書（一九三）
3　贈りもの（二〇五）
むすび……二一〇

暗い影

1 東京で

ふりだしは昭和一〇年(一九三五)四月、郁文館中学であった。千駄木町の下宿から大学(わたしは当時東大大学院に在籍中だった)への中間にあって、たいへんつごうがよかった。

羽織、袴の教頭高橋喬松先生が、教員室の中央の大火鉢に寄って職員や来訪者と話しておられる、その雑談が無類におもしろかった。明治時代の根本通明(先生は根本塾の塾頭)、下田歌子の話などが昨日のことのようにとびだした。

学校は明治二二年(一八八九)棚橋一郎によって創設され、先生は明治三一年以来、当時勤続四〇年の教頭であった。棚橋一郎の母が明治以来の女流教育者棚橋絢子(あやこ)、父が盲目の儒者棚橋松邨(しょうそん)(勝海舟・山岡鉄舟とも交友があった)である。若く貧しいとき、絢女が生活を支え、夫を助けて共に学んでいた。ある日絢女が、「もう食べるものがありません」というと、「なければいっしょに餓死すればいいじゃないか」と松邨はいった――大正末か昭和初め、学校の経営が困難で校主棚橋一郎、母絢子がある案を示したのにたいし、教頭高橋先生はその話を引いて二

人に直言されたことがあったらしい。高橋先生と松邨がわたしには重なって見えていた。

「神道を信じようとするのだが、私には信じがたい」といわれたことを、あいさつに行った日の日記にわたしは書いている。儒学など観念支配の道具にすぎないと、頭の中で考えていたわたしは、あの神がかりの時代に、生活化されたたしかな精神にとつぜん接して目を見はった。先生はさらに西洋の倫理学が入ってくると、友人といっしょに輪読会をして勉強していたという。

校庭につづいて夏目漱石の家があった――といえば、とたんに大よその人は気づく、『吾輩は猫である』の「落雲館中学」、その「倫理の先生」が高橋先生であった。漱石につかまったわんぱく生徒のために乗りこんだ、その日の話をわたしたちは一度聞いた。漱石は書画をもちだして鑑定を乞うたという(先生は美術品の鑑定家でもあった)――ずいぶんおもしろい一シーンが『猫』にははぶかれているとわたしは思う。

一年生で、放課後から夜、大学図書館で働きながら勉強している二人の生徒がいた。授業が終るとわたしもそこで勉強して、昼も夜もいっしょだったから、三人は兄弟みたいだった。また、朝鮮、台湾からきた生徒が少くなかった。みなたくましい身体で、新聞配達、牛乳配達などしているらしかった。五年生の張弘球や全相祐は、「朝鮮は日本に合併したので、征服されたのではない――植民地ではない」と主張していた。そのレポートを忘れない。働いている中学生や朝鮮・台湾・中国の生徒といっしょに勉強するなど、わたしにははじめての経験で、教師

になって、学ぶことが多かった。

翌昭和一一年(一九三六)、二・二六事件がおこった。わたしは日記に書いた。

二月二八日(金)……一二時ごろ行動を開始せりとの風聞……中心地に於いてはすでに続々避難を開始せりと。……中学一年、二年、憲法のプリント四枚づつ配付。冷静に考慮判断すべき規準を知らしむ。戒厳司令部は何ら具体的ならず。……

昭和一二年(一九三七)七月、「支那事変」の号外が出たときは考査の問題をプリント中であった。号外では、近衛首相が新聞記者を集めて「不拡大方針」を説明し、報道機関の「協力」を求めていた。わたしは確実にそれが拡大することを感じた。翌朝、中学二年の教室へ出ると、ぽっかり二つの空席があって、みんな黙りこんでいた。中国人の劉行恵と周嶷の席であった。

昭和一四年(一九三九)五月、育英中学に移った(鈴木正四の紹介だった)。池袋駅の近くで、もと鉄道中学といい、現場職員の子弟や鉄道省関係の職場の、みずから働き、勉強するものの夜間中学である。ある意味では全国から選り抜かれてきた生徒だった。夕食は学校給食だった。職場も学校もいっしょでは、おもしろいことばかりもなかったろうに、みんな仲好しで、けんかがおこりかけると、「よせ、よせ。けんかは閑人のすることだ」といういい方をしているのを知った。おれよりえらいなと思った。わたしはこの燈火の学校が好きだった。

ある晩教壇に上がると、「藤原先生へ」と書いた紙が、きちんと教卓におかれていた。抗議か

と思ってどきんとしながら開くと、ととのった字で書いてあった。

一、先生が歴史を受け持たれる最初の時に、育中の生徒の他校に優る最も大きな強みは何であるか、卒業する迄に考へておけと言はれましたが、それは、「育中生は（一般に言へば）活きた歴史の中に生活し、現実の歴史を凝視して居る」と言ふ事だらうとわかつて来ました。恐らくこれだらうと思ひます。

二、歴史の講義の時間を都合して、人生の目的、人生の意義について話していただきたいと思ひます。

三、人間の全ての行為は愛から発すべきではないか、愛が最も根底となるべきものではないかと思ふのですが、違つてゐるでせうか。

だれが書いたのかい？――いいかけてあやうく口を押えた。クラスで話しあったうえでのものであることが空気で感じられた。わたしは教科書を隅へおしやって、その夜は一時間、働きながら学ぶということなどについて話した。その一枚のザラ紙を、わたしはいまも大切にしまっている。

生徒はへたなわたしの授業をよろこんでくれた。補習だの模試だのといったものはいっさいなかったが、一高や浦和高校、広島高校、高等師範、専門学校等へぽんぽん入った。反面病気でたおれるものも少くないようであった。和田校長は紳士で、生徒を愛し、いや敬愛しているようだった。年輩の教師や教練の教官もそうであった。一年たってわたしはノート一冊に、学

校についての感想、意見を書いて校長に提出した。

昭和一四年五月二二日、天皇から「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」が授けられ(わたしはその日この学校へ転任したことになる)、その翌年は「皇紀二千六百年」の記念式典があった。「支那事変」は中国全土に拡大していった。郁文館中学ではN幹事というのが軽薄に戦時化をすすめ、反感からおこった生徒のストがつぶされる、といったことがあったが、育英中学では、比較的落ちついていた。

わたしは昼間は完全に自分の時間で、大学図書館、上野図書館、近くの大橋図書館などで勉強していた。その間、友人といっしょに、「町人社会の女性」、「新しき精神――蘭学の発達について」、「青年篤胤」、「幕末国学の性格――大国隆正について」など、小研究を二、三発表した。また、河合栄治郎編の学生双書の一冊『学生と歴史』に、歴史の教師として小さいものを書いた。

そのころわたしは、天主教、国学、心学、それから蘭学―洋学の発展など、江戸時代の思想史を勉強していた。暗黒の時代を生き、切り開いていこうとするその時代の人々が過去の人に見えなかった。蘭学のあとわたしはヘルン小泉八雲について研究をすすめていた。羽仁五郎とヘルンから、わたしは日本史の学び方を学んだといいたい。

「大東亜戦争」勃発の翌昭和一七年(一九四二)五月ごろか、東京に残っていた四、五人で高等学校のクラス会をした。内務省にいるのが、占領した南方や、これからのニュージーランド、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

オーストラリア各地に神社を建てて現地民を統治するのだと勢いこんでいた。「そういうことが神社でできるのかね？」とわたしはいった。

その暮から翌一八年の二、三月ごろ、夜おそく帰る飯田橋駅の長いホームに、へどがあるのに気がつくようになった。そして赤い顔した参謀胸章の将校を見た。若い中尉だった。それでもきちんと歩こうと努めながら、ゆらゆらと動いていった。それ以後、へどと参謀将校をたびたび見た。駅の近くには芸者街の神楽坂がある。こういう若造まで——。敗戦は遠くない、と思った。

その二月ごろ、視学の私宅へ二回呼びつけられ、学生時代のことによって、わたしは学校を辞めることになった。なにをいっても通らぬ戦中である。準官公庁には反戦傾向のあったものはおかぬということだったのだろう。私宅へ呼んだことにいっそう怒りと軽蔑を感じた。

九月、新学期の退任式のとき、校長は、「自分は席をはずすから、いいたいことを遠慮なく話せ」という。「いていただいたほうがよい」といったが、校長は惜別の辞を述べると、律儀に席をはずした。わたしは維新以後の「現代の発展」について話した。四月以来、引きつづき授業に出ていたけれども、いつでも急に辞めなければならなくなるので、その年は古いところはかんたんにして、明治維新を目ざして話していたから、さいごの一時間で一応つづめをつけておこうと思った。それからわたしは、雑草は刈られても踏まれても芽を吹き出していく、といったことを添えた。

学徒出陣がはじまって、わたしたち親子三人が東京駅を立つ夕には、学友を見送るK大学生の熱狂が渦まいていた。

2 師と友

わたしの村——島根県八束郡意東村は中海海岸(近年、白鳥渡来の名所になっている)から南の山地にかけ、農、漁、山村の部落から成っていた。家は田地が一町歩(一ヘクタール)ばかりに畑、山林少々。半農半漁の下意東部落では純農として一番小さいほうでもなかったが、五人兄妹の八人家族で、自作の上に小作を兼ねていた。第一次大戦後の物価騰貴—成金時代(米騒動期)—その後の不況時代、そういう時代の動きにかかわりなく、いつも貧しく、いつも肥料代の借金があるようだった。

小学校四年生のときの高倉篤先生からさかんに作文を書かされた。よくできたのを清書させ、綴じてつくった立派な表紙の『文苑』がわたしたちの誇りであった。六年から高等科卒業までの福田光夫先生からは新聞を読むことを教わった。教員室の新聞を一日おくれに教室に借りていって読んだ。校長(郷土史家須田主殿)先生から、国際聯盟ができて戦争はなくなるのだ、と教わった。わたしたちは自治会で文芸誌(!)『みかつき』を出した。

福田先生が父母を説得して下さって、松江中学に入学、二年から岸清一博士(松江中学卒、弁

護士、日本体育協会長等)による岸育英資金をうけた。学校はきびしい点数主義で、わたしはよい成績でありたいと大いに決心し、大いに努力したが、一、二位などという人にたいしてはまるで問題にならず、いつも育英資金生であることに悩んだ。わたしは『中学生』、『文章倶楽部』などの雑誌に投書したり、校内、校外の同人誌に関係したり、そんなことで夜をふかしては後悔していた。三年の国語に、「響りんりん音りんりん　うちふりうちふる鈴高く……」というあの新体詩が出ていた。先生の説明がおもしろくないので議論になって、藤村に手紙を出した。「先生のいふことに従ひなさい」という葉書がかえってきた。

国語の倉敷英一先生は、「おれの酒をやめても援助してやる。高等学校へいけ」と励ましてくれた。先生は文検(教員検定試験)で松江中学の先生になり、小学校代用教員時代の教え子二人を手元にかかえて中学に出してやりながら、勉強をつづけていた。倉敷先生や多くの友人とのあいだで、貧しく、内気で、そして生意気なわたしは呼吸をしていた。

赤土の校庭の削り残した台上に二本の巨松があった。二本松といい、双松といって学校のシンボルになっていた。学校には永年勤続の大先生が多かった。松江中学はラフカジオ・ヘルン小泉八雲が英語教師として在職した学校である。わたしは、ヘルンについての話を聞き、ヘルンの松江中学に学ぶことをよろこんだ。

昭和三年(一九二八)松江高等学校文科入学。県興学資金の貸与をうけた。雑誌の文学作品を読み、友人と詩を書き、文芸部(新聞部担当)でいつも生徒課の監視下にあった。これら役人教

官のあいだにおける加藤恂二郎教授(経済、詩話会顧問)の温かさ、高橋敬視教授(哲学)のきびしい学風に高等学校らしいものを感じた。

中学以来の文学志望で、文学以外考えたこともなかったが、大学の志望科選択のぎりぎりになって、生きた社会をとらえる力もないと断念、動かぬ過去だったら、と歴史に行くことにした。考えたこともなかった世界がとつぜん開けてきた。

昭和六年(一九三一)、東大文学部国史学科に入学。赤門前から本郷三丁目への夜店の本屋に、左翼書がずらりと並んでいて、これでは都会の連中にかなわないと思った。黒板勝美、辻善之助教授等の実証主義歴史学に、滞欧中の平泉澄助教授が帰って、皇国史観が急速に波頭を上げ、科内、学内に朱光会という右翼団体がおこった。わたしにはそれとは別の友人ができた。

大震災(中学一年のとき)後の不況の上に重なった世界恐慌のはじまりは高等学校時代であったが、大学時代は、満洲事変(一年生)、右翼による暗殺——五・一五事件(二年生)、そして三年生のとき滝川博士京大事件がおこった。卒業論文は提出したが、一夜見知らぬ二人の紳士の来訪によって、「別荘」と呼んでいた留置場へ。子を背負って入れられてくる失業男、かっぱらいの日傭い、水兵上がりの窃盗犯、朝鮮人、東交労の指導者、学生、学生、学生。沖縄出身の印刷工に求められて、小さい声で日本史の講義をした。わたしの最初の「授業」だった。

昭和九年(一九三四)三月卒業、大学院へ(その二年めに郁文館の教師となった)。すさまじい失業時代であった。三五名くらいの卒業のうち、その四月まともな就職をしたのは五、六名だ

ったろうか。

すでに片づくものは片づいた時代であった。Oはとうに停学で一年おくれ、西洋史学科のTもNもそうだった。卒業してもみんな無職、毎月集まって、いろんなことを話しあっていた。わたしたちは大学時代から、一級上の鈴木良一、同級の北山茂夫、今井林太郎、野口逸三郎その他と、羽仁五郎の教えをうけていた。「東洋における資本主義の形成」の発表(昭和七年二月、史学会、のちに『史学雑誌』に連載)が動機であり、北山茂夫の先導であった。

羽仁先生は『日本資本主義発達史講座』の執筆・編集の多忙のなかをよくわたしたちを迎えてくれた。叱られることが多かったが、よくごちそうになったり、みんなで築地小劇場へいったり、年末には浅草へ押し出したりした。病気で説子夫人に心配かけるものもあった。

一方、史料編纂所の西岡虎之助家をよく訪れた。反骨の史学者「西岡さん」のところへ行くようになったのは学生時代からであったが、ここも北山茂夫に誘われてであった。西岡さんは、依頼のあった研究などの仕事をわたしたちにあたえ、『新日本歴史双書』等を書かせようとした。わたしたちはこの双書執筆を中心に勉強していた。双書執筆者には東洋史の橋本勇、西洋史の小此木(おこのぎ)真三郎がいた。そのころまた日本大学・駒沢大学・上野図書館の女性勉強家グループ「伸びる会」の人々などと親しくなった。みんな勉強していた。

その後、国史学科のわたしたちのあいだにひずみが生じだし、周囲の人たちが心配した。わ

たしは問題がおこるごとに羽仁五郎のもとに駆けつけては叱られてかえった。帝国主義があらゆるものを分裂させ、友情さえ分裂させるのだと、羽仁五郎はきびしく、独立不退転であることを呼びかけた。が、友人と会うこともいつか少くなっていった。Tが精神の異状を来たして国へ帰った。それから双書執筆者打合わせ会の席、とつぜん橋本勇の、「こんどは再起不可能と思うから執筆者を変更してほしい」という代筆の葉書が発表され、おどろくまもなく彼の死が伝えられた。

昭和一一年(一九三六)三月二三日、熊谷市外佐代田村の家の葬儀に一同で参列した。西岡さんが代表して弔辞を読んだ。死を聞いて以来わたしたちは興奮し、雲を踏んでいるようだったが、坐って読経を聞き、飾られた写真を見ていてはじめて涙が流れた。温く、穏かな、そして不屈の男だった。長女が生まれて、まだ名がつかぬそうだがと、祝いの葉書をくれたのは一〇日まえであった。市川の町から日本を脱出する前の郭沫若との座談会にわたしを連れていこうとした。病弱の上にいく度か検挙されていた(さいごの検挙のあと彼の下宿を訪れたのがわたしの検挙の動機であった)。再発した肺結核が急進行したのだった。彼を殺したのは——。「うおっ」と、天から落ちたようなすさまじい声がおこった。びくっとして、つい声のほうを見た。羽仁五郎がハンカチで面をおおっていた。

それ以来、毎年命日にわたしたちは羽仁五郎、説子夫人、子どもさんたちと墓参した。そのある日、羽仁五郎は、「橋本君はぼくの『東洋における資本主義の形成』の最初の成果だったの

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com